



「ほくろ」には、とったほうがいいものもあるの

とったほうがいいといわれる「ほくろ」は

「ほくろ」は、皮膚の少し中のところ（表皮と真皮の間）に、メラニンという茶色の色素が集まってできたものです。

ところが、手のひらや足の裏の皮膚には、ふつう、このメラニンの色素をつくる細胞が少なく、角質層が厚いため、ほくろができて目立たないのです。

そのため、手のひらや足の裏にほくろができると、「とったほうがいい」といわれることがあるようですが、できて心配はありません。

とろうとしていじったりすると、かえって傷あとが残ったりします。

しかし、ほくろの中には、手のひらや足の裏にかぎらず、まれに、ほくろの「がん」になるものがあるため、注意が必要なのです。

ほくろのがんになると

ほくろが、半年以内で直径7ミリメートル以上に、急に大きくなったときや、ほくろのまわりが黒い色がしみ出したように見えるときには、ほくろのがんのことがあるので、すぐに皮膚科のお医者さんに、診察してもらったほうがよいようです。

ほくろのがんは、そのままにしておくと、体じゅうに広がる危険がありますが、早く見つけて手術すれば、完全になおります。（監修・保志 宏）

